

小説『坊ちゃん』と徳島の人たち

三原 茂雄

はじめに

小説『坊ちゃん』が発表されて百年になる。愛媛県は近いからか徳島県もこの小説とかかわりを語る事が出来る人がいる。文学や教師論で読み取る方は居ると思われるが、数学の視点では少ない。

徳島県と関わりのある人物

(1) 弘中又一～モデル

弘中又一は明治6年山口県の生まれ。『坊ちゃん』のモデルと言われ一般には数学の教師のように思われているが、英語である。漱石が赴任後、よろしく、と挨拶に伺ったのは弘中だった。もちろん英語の教師としての挨拶である。

松山中学校の本校から西条分校に転勤しているが、あまり本意ではなかったのか、伝をたどって徳島中学校の第二分校・富岡分校、

現在の富岡西高校に赴任してくる。

30年ほど前の富岡西高校の同窓会名簿には、弘中の名前はあるが、赴任期間や離任年の記録はない。弘中について徳島での研究は四国女子大の新垣宏一の研究が初期のものである。

(2) 林鶴一～モデル

富田小学校の和室に「探玄究幽」と筆で書いた額が掛かっている。東北大学教授であった林鶴一の書いたものである。徳島中学校から第3高校を経て東京大学を卒業。

後に父と知り合いであった松山中学校の校長からのたつての頼みで松山中学校の数学教師として松山中に赴任する。山嵐のモデルの教師が大物なので、彼を人物・学力共に指導できる教授ということであった。京都大学の助教授からは異例の人事。だが、この経験が林の中等教育に取り組む切っ掛けとなる。

林は個性が強く、上に向かっても言うべきことを言うことが、坊ちゃんのモデルと噂さ

れるゆえん。本人はその事を嫌がった。日本数学教育学会の初代会長。

(3) 三守守～物理学校の創立者

「さいわい物理学校の前を通りかかったら生徒募集の広告が出ていたから、なにも縁だと思って規則書をもらってすぐ入学の手続きをってしまった」(『坊っちゃん』20頁)とあるのは、物理学校(現在の東京理大)である。この物理学校の創設者の一人が三守守。徳島の寺島町の出身となっているが、阿波藩江戸詰の藩士の子であり、明治初期に一度地元へ戸籍を置いたが、短期間で東京に帰った。

東京大学物理学科を卒業した者たちが理学の普及こそ国の発展だと創設したのが物理学校。三守は、東京工業高校(現在の東工大)に勤めていたので、創立から自身が死ぬまで物理学校に関わった。無報酬で教壇に立ったのはあたりまえであり、維持同盟に加わり資金面でも援助した。

また、日本数学教育学会の二代目の会長。

東京理大の五十年史や百年史には、前から数ページのところに三守守の1ページ全面の写真があり、その功績に応じている。

(4) 海屋～へたな懸物の字

「床のまん中に大きな懸物があって、おれの顔ぐらいな大ききな字が二十八字かいてある。どうもへたなものだ。あんまりまずいから、漢字の先生に、なぜあんなまずいものを麗々とかけておくんですと尋ねたところ、先生があれは海屋とって有名な書家のかいたものだ教えてくれた。海屋だかなんだか、おれはいまだにへただと思っている」(『坊っちゃん』132頁)(この海屋が、貫名海屋のことで、1788～1863 徳島市に生まれ京都に住んだ。幕末の三筆に数えられる書家で、画家としても優れていた。)

『坊っちゃん』の注釈で気付いたへたな字を見てみたいと探すと、徳島で菘翁と多くの場合に呼ばれていると分かった。10年余り程前に徳島城博物館の春の企画展「幕末の三筆

貫名菘翁」というパンフレットでその一端の字を見ることが出来る。そこに28字のものがある。海屋ではなく、菘翁とある。名前の変更はそれなりに思いがありそうだが、私にはわからない。新蔵町に「菘翁美術館」があるが、第2, 4土曜日以外が休みである。

おわりに

中学校の生徒と師範の学生が喧嘩する、今では考えられない。チップが五円、高いのかやすいのか。何となく3年で卒業、当時ストレートに物理学校を卒業したのは、約1割足らず。先祖の自慢の「清和源氏から多田満仲」、このオチが「ただの饅頭」は笑える。また、「下読み」との所は、数学教師なら「下調べ」である。徳島には関係がない。

【 引用 文 献 】

- ・ 夏目漱石 『坊っちゃん』 新学社、1979年。
同書からの引用は括弧内にそのページ数を記す。

【 参 考 文 献 】

- ・ 近藤英雄 『坊っちゃん秘話』 青葉図書、
1984年。
- ・ 平岡敏夫 『「坊っちゃん」の世界』 塙書房
1992年。